

### 3.11 全国ユースダイアログ公開報告書

■開催日時 2022年12月4日(日)13:00~16:00

■開催先 東京都(立教大学)、愛知県(日本福祉大学)、大阪(まるっと西日本)  
※3都府県にリアル会場を設置し、オンラインで3会場を接続して実施

■開催方法 対面とオンラインのハイブリット

■参加者数 78名(参加者57、運営18、登壇者3)

■登壇者(3名)

- ・Aさん:岩手県釜石市で被災。震災当時は小学校低学年。
- ・Bさん:宮城県山元町で被災。震災当時は小学校低学年。
- ・Cさん:福島県南相馬市で被災。震災当時は小学校高学年。

■話の概要

(プライバシー的な内容も含まれるため、抜粋/概要版としてまとめています。)

<Aさんの体験談>

学校で皆が机に座っているときに地震に襲われた。その地震で津波が来るということで、最初に避難した場所が老人ホームだった。老人ホームに避難した時に余震が来て、その余震で横の崖が崩れた。そのがけ崩れを見て、ここでは危ないということで、近くの山に登って全員逃げた。山に登り終わった時に津波が来たという声の下から聞こえてきた。山から降りた時には家も何もなくて、平らな平地のような状況になっていた。山から降りた後は、当時の中学生に手を引かれて、恋の峠という高い場所まで皆で走って登り、その上が高速道路に繋がっていた。そこでトラックに乗せてもらい、避難所の体育館まで逃げた。

体育館の中ではご飯がなくて、1人1つお菓子をもらい、飲みものはコップの水を回し飲みしながら飲んでた。夜は新聞紙をかけてみんなでくっついて寝て一晩すごした。その後は、小学校に逃げて、親の迎えを待っていた。父は消防団に入っていたので、早めに消防車で迎えに来た。住んでいた地域はもともと315世帯あったが、津波で流されて10世帯しか残ってなくて、残った人の家で1週間ほど生活していた。1週間の間に食べ物も無くなったりして、近くのお店から取ってきたり、がれきの中に埋もれている缶詰などを食べていた。その時に亡くなった方の遺体があって白くなっていた。当時は遺体を見たことがなかったので何とも思わなかったが、今はあまり思い出したくない。

その後は、岩手県花巻市の知り合いの家に住ませてもらい、家を借りて少しの間そこで住んでいた。その時は1学期だけ通った。その後、釜石に仮設住宅やがで学校が再開したので戻った。仮設住宅は狭くて不便な所も多いが、やっぱり住める場所があるのは良いなと思った。そこからは、当分仮設住宅で過ごして、ボランティアや色々な人たちににお世話になった。その当時ボランティアので支援に来ていただいた方が、今日の会場にも来ている。震災があったからボランティアの人とも関わっている。今もその関係が続いているのは良いことかなと思っている。失うだけでなく、得たものも大きいなと感じている。

<他会場からの質問>

質問①

友達同士で震災について話し合うことはあるか？今でも当時のことを振り返ったりするのか？あとは被災の経験を踏まえたうえでの学習などがあるかお聞きしたい。

Aさん

震災のことについて友達と話すことは少しある。震災にあったことで、防災訓練の頻度が少し多くなったり、周りの意識も高くなっていい感じに進んでいた。防災系の学習も増えていた。

質問②

ボランティアの支援を受けてきたとのことだが、今はどんな関わりがあるか

Aさん

今は親戚づきあいみたいな感じで、家に遊びに来たりしている。

質問③

今、復興して町自体がきれいになってきている中、小学1年生の時の町と今の町の変化をどう感じているか。

Aさん

震災前に比べれば家の軒数も人も減ったが、震災からどんどん復興して行って、土地も高くなり、町も明るくなったと思う。

質問④

仮設住宅の住人同士の繋がりは今も続いているか。

Aさん

今も繋がりがあって、たまにあった時は話したりしている。

質問⑤

津波で大変な目にあっただ中で、漁師の仕事を選んだのは色々な思いがあると思う。漁師を目指したきっかけは。

Aさん

津波関係なく、漁師はずっと親がやっているのを見て、保育園の頃からやりたかった。津波が来て全部流されたが、その時は全国からの支援で物が揃ったり、親もそのまま漁師を始めたりにして、そういうのを見て、やっぱり後を継いで漁師をやりたいと思うようになった。

## ■話の概要

### <Bさんの体験談>

帰りのホームルームで震災にあった。経験したことがない揺れで、直感的にやばいと思った。道路が割れたりし、子どもたちは一人で帰せないとなり、同級生たちと体育館に避難し、親が引き取りに来るのを待った。両親は職場に行っていたが、橋が崩れるんじゃないかという話で、道が通れないと迎えに来るのが遅くなるんじゃないかと思った。夜7時くらいまで一人取り残され不安だった。

学校は4月半ばから臨時休校になった。内陸の小学校だったため、学校が避難所として開放されて学校が使えず、授業も友達とも会えず、非日常を感じた。津波は受けなかったが、ライフラインが止まり、断水水道管破裂、電気は1週間停電で、普段の当たり前がなくなった。学校が再開したのが4月後半か5月。700人の避難者が来ていて、ペットの生活空間、救護室も増え、キャパがいっぱいだった。再開するとなったのは、仮設住宅ができて、完全再開が6月だった。

支援団体から物資をいただいたり、外部の支えがありながら町も復旧し、子どもたちも日常を取り戻していったが、津波被災者と地震だけの被災、家に被害を受けなかった人で、学校の先生から扱いの差を受けたり、あなたは津波被害にあっていないから、気を使って接してねと言われてたりして、理不尽だなと思った。津波を受けなかっただけにそのようなことを言われ、自分の思考にも影響されていたと感じた。被災した人の心情に配慮した制度があるといい。未だにこのような場所でお話しても、被災体験の情報がそちらに偏ってしまうのではないかと、まんべんなく耳を傾けてもらいたい。

### <他会場からの質問>

#### 質問①

水道管が破裂、停電などあったと聞いたが、これが一番大変だったということは。

Bさん

山へ水汲みにいかなければならず、当時2歳の妹をおんぶして、自転車のカゴにペットボトルを入れ、往復で2キロ3キロを一日に何回も2、3週間毎日やっていた。それが辛かった。

#### 質問②

当時食べ物が届かなかったり、困ったりした経験は？大学で公共政策を学ぶ道に進むきっかけや思いは？

Bさん

避難所にも行っていなかったので、まわってくるのに時間がかかった。うちが農家なので冷蔵庫に保存していたり、畑に残っていたもので凌いだ。

復旧復興過程を目の前で見ている、自分にできることはないかと思った時、被災者差別に

疑問を持っていたし、それを残していくのは、経験した自分にしかできないんじゃないか  
と思い、地域やコミュニティのことを学ぼうと山大に入った。

## ■話の概要

### <Cさんの体験談>

地震が発生したときは、小学校で6年生を送る会をやっていた。それから母が迎えにきて家に戻った。津波がくると聞き少し避難したが、津波がこないとわかって安心した。次の日原発が爆発したと聞き、市内の道の駅に避難した。すぐに戻れると思った。異常事態とわかったが、状況が理解できなかった。道の駅で数日過ごし、親戚にガソリンをもらい、東京の親戚の家に行って過ごしていた。避難というよりはプチ旅行のような気がしていて、おばあちゃんちや親戚宅に行くよと言われて、ワクワクした。

親戚の家で母親はどうしようとパニックになっていた。ペットを生きさなきゃいけないと思っていた。父親は公務員なので、母がすべて守らなければいけなかった。姉は何が起きているかわからない様子だった。親戚は早く逃げたほうがいいと切羽詰まっていた。学校に通わなくてはいけないということになり、千葉に移動し、千葉の小学校に3,4ヶ月通った。千葉に避難したときは不安で、いつ帰れるの?と母親に聞いていた。戻れないのかなど不安ではあった。戻りたいというより、日常を過ごしたかった。避難しているという状況が嫌だった。切り替えたかった。周りに避難者というふうに使われたのが嫌だった。避難じゃなくて、そこにいていいんだよと言ってくれる人がいてくれたらよかった。その後、姉が宮城の高校に通うため、宮城に引越し、小学校6年生から高校卒業まで宮城にいた。

子どもの頃はもやもやとした感情を説明できなかった。周りの人に震災を経験したと思われるのが嫌だった。自分の経験は重くないほうだと思っている。今ふりかえると悪い経験ではない。周りに3.11を経験していた人、かわいそうだと思われるのが嫌であって、別にかわいそうではない。当時、千葉の人たちには、かわいそうだから、気づかってあげなさいという扱いをされたが、一人の人間として扱ってほしいと思った。宮城は津波を経験していたからか、宮城には同じ思いの人がいてよかった、気が楽だった。大人になってその感情の理由がわかった。とりあえず、千葉から離れたかった。家族は私の大学進学と同時に福島に戻った。

### <他会場から質問>

#### 質問①

お母さんがパニックになっていたと聞いた。頼れる人がパニックになったとき不安にならなかったか。

#### Cさん

自分には自意識過剰な部分があって、自分がしっかりしようと思った。視野が広がったし、

自分のことは自分でやるという、覚醒した子どもになった。

## 質問②

ペットと一緒にいたと聞いたが、大変だったことはあったか。

Cさん

ペットはもう連れて行けないということになり、ねこと犬を離してバイバイした。震災が落ち着いたときに、どこかでつかまっているかもしれないと思って探したところ、犬とネコ1匹ずつが見つかった。犬は保健所に保護されていた。猫はペットショップの看板猫になっていた。もう1匹はいまだに見つかっていない。犬とネコと一緒に車の中で過ごしていて、車の中ではつらそうでかわいそうだった。そのストレスもあり切羽詰まっていて、逃さなきゃいけないとなった。でも、あのとき逃さなきゃよかったと後悔した。一番嫌な思い出です。

## ■登壇者からのメッセージ

<Aさん>

他の県にいる登壇者の話も聞いて、震災で感じたことはそれぞれ違うし、体験したこともそれぞれ違うので、聞いて良かった。体験したことを周りに話す機会をもらえたことは良かった。これからの自分の防災意識も高めていきたいと思った。

<Bさん>

お話聞いていただきありがとうございました。自分の生まれ育った地域、関わってきた人の震災経験しか知らなかったので、視野が広がり、違う土地では違う経験をされている方がいるのを改めて感じた。会場の座談会で、被災者差別にフォーカスしてお話したが、そういう差別は、知っていれば防げるものでもあると意見として出たので、災害が起こった時にみなさんの手で防いでいってくれたら嬉しいと思った。

<Cさん>

他の人の話を聞くことができ、ふりかえって話す機会をいただいてありがたかった。自分の中でしっかり考えられていないこともある。10年20年後自分がどう考えているか、自分に期待している。震災を伝えていくときに、かなしいことではなく、こうしようという対策になっていったらいいと思う。

## ■3人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

震災の経験といっても、登壇した3人の経験は三人三様で、感じたことも違い、被災者と一括りで考えるべきではないと改めて感じた。

Aさんは、津波を逃れるために、中学生に手を引かれて何度も場所を移動していた。家

が流され、仮設住宅に入居し、仮設住宅にボランティアに来た当時の大学生とは今もつながりがある。震災は失うものだけではなくという言葉が印象的だった。

Bさんは、自宅は津波の被害を免れたが、ライフラインのストップで2歳の妹の面倒を見ながら水を汲みに行き、学校が避難所となったことで自由に遊ぶこともできず、我慢することが多かった。そんな中、学校の先生から、津波の被害があった人とない人での扱いの差を受けたことに理不尽に感じていた。心の傷は、被害の大小ではないということを訴えた。

Cさんは、原発事故により避難を余儀なくされ、県外の小学校では、避難者やかわいそうというふうに扱われるのが嫌だったという。ここにいていいんだよと言ってもらったこと、一人の人間として扱ってほしかったということに胸が締め付けられた。

3人の話から、子どもだからといって、子ども扱いをするのではなく、一人の人として尊重すること、被害の大小ではなく接することが重要であり、周りの人たちの接し方や関係性によることが大きいことがわかる。一方で、ボランティアと遊んだことなどの交流が温かい思い出となっていた。災害時には子どもが子どもらしくいられるよう、その子どもの意思を尊重するような視点を持つことが大事だと3人の話から学んだ。

以上